

666

102

666-102



1200501573911

推薦圖書目錄

第二十輯

大日本青年團總務部企畫課編

666  
102



666  
102

和十四年八月

推薦圖書目錄

第二十輯

大日本青年團本部

66  
1



はしがき

本團が青年の讀物として適當なる圖書の推薦事業をはじめてから既に十一ヶ年の歲月を閲したが此の計畫は毎回非常な好反響で迎へられてゐる。

圖書の推薦方法は本團に推薦委員會を設け、新刊圖書に就き毎年二回委員會を開催して、慎重審議の上青年及び青年指導者の讀物として適當なるものを推薦し、其の都度本目錄及び日本青年新聞を通じて夫々發表して來たものである。

今回の推薦圖書は本年一月以降六月までの間に出版されたもののうちから、左記諸氏並に本團關係者によつて六月十三日帝國圖書館に於て、五十四冊を厳選したものである。



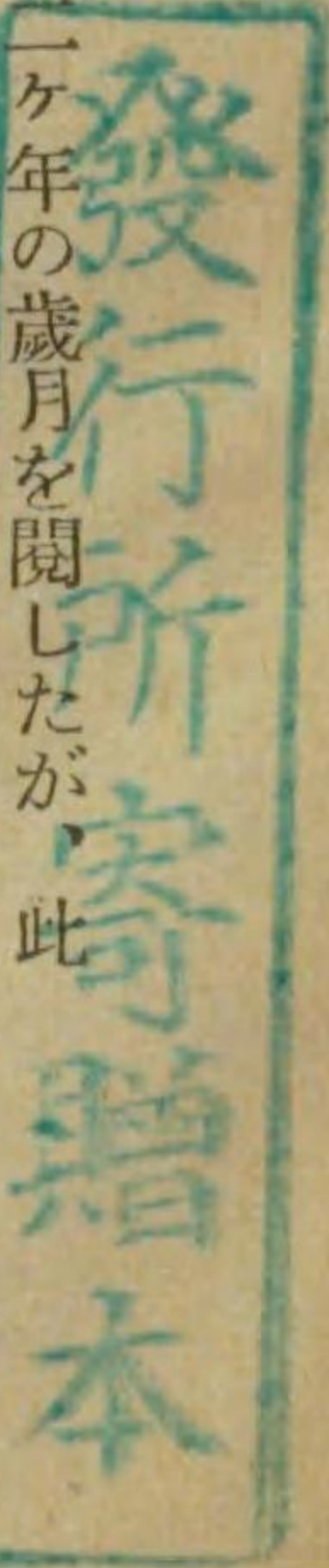
- |            |        |
|------------|--------|
| 帝國圖書館長     | 松本喜一氏  |
| 日本放送協會教養部長 | 小尾範治氏  |
| 東京帝國大學助教授  | 青木誠四郎氏 |
| 文部省社會教育官   | 小島隆氏   |
| 文部省嘱託      | 伊藤治郎氏  |
| 帝國圖書館司書    | 岡田溫氏   |
| 帝國圖書館司書    | 舟木重彦氏  |

本團よりは、栗原常任理事、及び熊谷總務部長、榑原指導部長、多羅尾需品部長、石原農漁課長、木村組織課長、志村企畫課長が出席した。

廣く青年團並に青年教育關係方面に於いて利用せられんことを切望する。

昭和十四年八月

大日本青年團總務部企畫課





666  
102

目次

修養・處生	
選集倫理御進講草案	杉浦重剛著……(一)
武士道讀本	武士道學會編……(二)
昭和國民讀本	徳富猪一郎著……(三)
國民の書	永田秀次郎著……(四)
土を語る	有馬頼寧著……(五)
勤勞教育の理論と方法	大倉邦彦著……(六)
國家・政治・經濟・兵事	
良く税の問答	大倉財務協會編……(七)
皇民の書	武藤貞一著……(八)
國民防空讀本	内務省計畫局編……(九)



大陸國策現地に視る……………朝日新聞社編…(一〇)  
 興亞經濟を描く……………東京日日新聞社經濟部編…(一〇)  
 歐洲の内幕……………ジョン・ガンサー著…(一一)  
 大江 專一譯…(一一)  
 滿蒙開拓青少年義勇軍……………朝日新聞社編…(一二)

歴史・傳記

荒鷲の母の日記……………濱野 修譯…(一四)  
 先人を語る……………本多熊太郎著…(一五)  
 ロシヤ侵寇三百年……………本山桂川著…(一五)  
 朝陽門外……………清水安三著…(一六)  
 國史通記……………西田直二郎著…(一七)  
 吉田松陰……………中里介山著…(一八)

地誌・紀行

若きドイツ……………朝比奈策太郎著…(一九)  
 大陸支那の現實……………藤田元春著…(二〇)  
 ソ聯報告……………布施勝治著…(二一)  
 孤獨……………大江 專一譯著…(二二)  
 海南島讀本……………南支調査會編…(二三)

體育・衛生

劍道讀本……………野間 恒著…(二四)  
 結核は必ず癒る……………厚生省保險院編…(二五)

科學

萬人のための科學史……………松平道夫著…(二六)  
 趣味の世界數學史物語……………鏡淵 稔著…(二七)

文學

60  
1



建設戰記	上田 廣著：(二六)
宮澤賢治名作選	松田甚次郎編：(二九)
津輕の野づら	深田久彌著：(三〇)
鐵血陸戰隊	新潮社編：(三一)
幕末愛國歌	川田 順著：(三二)
土に祈る	相馬御風著：(三三)
愛國詩集	佐藤惣之助著：(三四)
征野千里	谷口 勝著：(三五)
脇坂部隊	中山正男著：(三六)
北岸部隊	林 芙美子著：(三七)
支那事變歌集	齋藤茂吉選 佐木信綱編 讀賣新聞社編 阿部知二著：(三八)
街	

産業

持てる國日本	大河内正敏著：(三九)
戰時經濟早わかり	大阪毎日新聞社經濟部編：(四〇)
新農村の建設	朝日新聞社編：(四一)
廢品回收及更生品	關根康喜著：(四二)
養豚の實際	永田厚平著：(四三)
趣味と實益 農家の副業	谷本龜次郎著 保夫著：(四四)
實用農藝全書	西田孝太郎著：(四五)
胡瓜栽培の實際	堀 準爾著：(四六)
西瓜栽培の實際	堀 準爾著：(四七)
茄子栽培の實際	堀 準爾著：(四八)



修養處生

選集 倫理御進講草案

杉浦重剛 著

四六判 四二八頁・七八第一書房



今上天皇が東宮におはせし大正三年に東宮御學問所が設立せらるゝや、杉浦重剛先生はその御用掛を拜命、倫理科御進講の大任を擔當せられたことは諸君も既に御存知のことと思ふ。抑々杉浦先生の御進講たるや、將來我國の至尊として立たせ給ふ皇太子殿下の御修養のためのもので、我等臣民のためのもではない。故にこゝに掲げた倫理御進講草案集は杉浦先生の全草案中より我等臣民にも適する御進講が集められてはあがるが、尙このことを念頭に置いて讀むべきである。

卷頭に杉浦先生の倫理御進講の趣旨と云ふのがあるが、その中に御進講の方針について、一、三種の神器に則り皇道を體し給ふべきこと。一、五條の御誓文を以て將來の標準と爲し給ふべきこと。一、教育勅語の御趣旨の貫徹を期し給ふべきこと。の三條が掲げられてある。この三箇條を以て大體の方針とせられ、支那及び歐洲の事例をも參酌して述べられたもので、本書には四十五篇が收められてあるが、何れも平易で具體的である。本書を通じて古武士的な精神と和漢洋に及んだ學識とを兼ね備へた杉浦先生の偉大な人格に接することができる。

60  
1



出来る。

## 武士道讀本

武士道學會編  
四六判 二五七頁 一・八〇 第一出版協會

この事變に際して示された皇軍將士の赫々たる武勇、鬼神をも泣かしむる武士道精神は諸君も既によく知らるゝ通りである。だがこの武士道精神は今事變に際して初めて示されたものではなく、日露役にも、日清役にも、否由來する所は遠く肇國の昔にあつて、歴史の進展と共に愈々研磨されて、今日日本精神の眞髓となり、國體の精華となつてゐるのである。そこで武士道の歴史的發展を示して今日の日本精神の由來する處を明かにしようとしたのが本書である。

本書には碩學名士の筆になる左の十五篇が收められてある。之を大體歴史的年代の順に並べ、必要に應じて解説が加へられ平易に讀めるように編輯してある。「青少年の座右に送り度い」と云ふ編輯者の意圖も良く窺へ、武士道入門の書としては誠に恰好なものと思はれる。

國體と武士道(近衛文麿)・武士道の淵源(富山高等學校長 蜷川龍夫)・君臣一如の情趣(文學博士 福島政雄)・萬葉人の忠君愛國(文學博士 武田祐吉)・武士の起源と武士道(文學博士 渡邊世祐)・武士道の根本精神(文學博士 吉田靜致)・武士道の神髓(文學博士 平泉澄)・武士道の話(菊池寛)・山鹿素行の武士

## 昭和國民讀本

徳富猪一郎著

菊判 三〇二頁 一・〇〇  
東京日日新聞社  
大阪毎日新聞社

著者は近世日本國民史の大著に見るも明かなように、皇室中心主義を根底に置いた史家である。時勢を憂へ教學を論ずること屢々であるが、その由來する處は常に皇室中心主義である。今こゝに掲げた昭和國民讀本も自らこの主義に基づくものであることは云ふをまたない。

著者は今年喜壽を迎へられたが、之を記念して「一老兵として、戰場に馳驅する心を以て、聊か君國に酬いと欲するの微志」を以て本書を昭和聖代の國民に送られたものである。内容は一言にして云へば、日本精神の把握と、同時に將來への方向づけである。その爲に著者は先づ國史を説いて日本精神の發露を系統づけ、之が把握を科學的ならしめようとしてゐる。著者は斯う云つてゐる。「日本人先づ日本を知れ。日本を知るの鍵は日本國史を知ることである。日本國史を知るとは皇室を知ることである。」と。この僅かの言葉の中に著者の意圖は洵によく現はれてゐる。皇室を中心として進み來つた我國は、既に今日世界の巨人群中の一である。



斯くなると國運は停滯することを許さない。進まざれば退くより外がない。退かざれば進むより以外に途はない。勿論我等の行く途は進むの一路である。こゝで著者は「皇道の世界化は日本の天職」と説いて居られる。これが今後の我等の行く可き方向である。

例に依つて文章は簡潔にして力強い。ぐんぐんと引つ張られて行く文の魅力には、流石操觚界の大先達と感ぜざるを得ない。必讀の書として諸君にお薦めし度い。

## 國民の書

永田秀次郎著

四六判 二五七頁 一・〇〇 人文書院

嘗てこの著者の出版された隨筆集の中に、自分は度々講演したり、放送したり、挨拶の辭を陳べたりするので、如何にも自分が話術の巧者の様に世間から云はれて居るが、實は決してそうではない。自分は五分の挨拶を依頼されても、十分の放送を引き受けても、いつも前日から充分に話すことを準備し、何回も豫行して五分なり十分なりの時間を無駄にしない様に用意してかゝる。樂に話して居るようでも、決して所謂話術の巧妙に乗つて思ひつきを話してゐるのではないと云ふ様な意味のことを書いて居られた。これは誠に敬服すべき言葉だと思ふ。著者のこの言葉を念頭に置いて本書を繕いて見るといふ。この本も著者の他の本と同じように、輕妙で、朗らかで、讀んで居てまことに心持がよい。だがその一字一句の中に秘められた著者の意向を讀み落

してはならない。

例へば巻頭に戰時國民の覺悟と云ふ短かい一章がある。その中にこんな一話がある。古い書物の中に「外より入る者、中に主無くんば止まらず。中より出づる者、外に應ずる者無くんば行はれず」と云ふ言葉がある。今われわれが銃後後援と云ふ重い荷を擔ぐ場合に、前は役人が擔いで後は國民が擔ぐ。片棒の役人がヨイシヨと云ふのに、相棒の國民が黙つて居たのではどうにも調子がとれない。役人が前でヨイシヨと云へばわれわれが後方で之に應じて間の抜けぬやうにコラシヨと應へなければならぬ。そして官民一致銃後後援の仕事が完成しなければならぬと云ふことを諧謔を交へて説いてゐる。これなども只讀み過せばそれ迄の話、考へれば役人に取つても國民にとつても示唆に富んだものではないかと思ふ。是非一讀をお薦めし度い。

## 土を語る

有馬頼寧著

四六判 二八五頁 一・六〇 砂子屋書房

著者が數年來新聞や雜誌に發表されたもの、ラヂオ放送、その他講演、訓話等を蒐録したもので、大部分は農村の青年を對象としてゐる。全體で十六篇で、何れも軽い讀物であるが、その中に汲みつくせない無限の教訓がある。著者の自傳を簡單に記した「思ひ出話」、松田甚次郎氏の名著「土に叫ぶ」並に之に關聯して農民文學を論じた「土の問題」「農民文學に就て」「農民文學に望む」、時局の上から農村問題を取扱つたものとし



「物から人へ」「支那事變と産業組合」、時局關係のものとして「所謂國民組織の再編成に就て」「新東亞建設と政治の革新」等が内容の主なるものとして掲げられてゐるが、何れも平易な談話體で、親しみを以て讀むことが出来る。全篇を通じての編輯は令息賴義氏に依つてなされたものであることを附記する。

### 勤勞教育の理論と方法

(宗教的行としての集團勤行)

大倉 邦彦 著

四六判 二一八頁 一・三〇 三省堂

著者は大倉精神文化研究所長として、その敬虔な宗教的行の思想は、特色あるものとして既に世に多く知れわたつてゐる。又著者は早くより近年の知識偏重主義の教育方法に對して甚しい不滿を感じ、知は行と合一してこそ初めて意義のあるもので、行の伴はない知識の如何に根底の淺いものであるかを本書の中に於ても強く主張して居る。この様にして著者の勤勞即ち行の思想が生ずるのであるが、著者の云ふ勤勞は、單に勤勞そのものだけを云ふのではなく、勤勞の中に全生命を見ると云ふ宗教的深味に迄掘り下げたものである。故に著者は行を分つて靜的行と動的行との二つにし、靜的行とは祭祀、佛事、坐禪、念佛唱題等専ら宗教的行事を云ひ動的行とは靜的行の精神を其儘勤勞作業、或は人生生活の全般に及ぼしたものの謂としてゐる。

この様な著者の根本思想をこの本では四つの章に分つて記されてある。第一章は學問研究の本領と題し、専ら學問の意義について述べられてある。學問が單なる知識でないことはこの章で明かである。第二章は主知主義の教育は何を生んだかと云ふ題であるが、こゝに近年の主知主義教育が痛烈に批判されてある。第三章は行及び行としての勤勞であるが、本書の主點はこの章に存するので、こゝに著者は自説の主張を最も明確に示してゐる。最後は生活行と云ふ章であるが、その章名に依つても明かである通り、行の精神を日常生活の具體的現實に即して説いたものである。その説く所論ずる所すべて著者の體驗と信念に出で、居るので、讀む人の心を強く打つものがある。特に指導の任に當られる人々には必讀の書としてお薦めし度い。

### 國家・政治・經濟・兵事

### 良く税の問答

大倉 財務協會 編

四六判 六五六頁 一・七〇 有斐閣

この本は實は讀むためのものではない。備へつけておいて實際上の便利に供するといふ本である。書名のやうに税に關する種々雑多な實際上の疑問を捉へて來て、それを一々質疑應答といふ形で、噛んで含めるやうに懇切丁寧に解答を與へてやる本である。所得税以下地方税にまで一切の租税について、そのほか税制全般に亘ることまで細大漏らさず集められてある。凡そ實際上税に關することでは解らんこと、疑問に思はれることがあつたら、何でもこの本によつて知ることが出来るといつても過言でない。いはゞ税の實際についてのデパート



であるといつてもいゝであらう。だからこのやうな本を諸君に一人々々にお奨めするといふわけには行かない  
青年團文庫とか村の図書館などには是非一冊備へておいてよいものと思ふのである。

## 皇 民 の 書

武 藤 貞 一 著

四六判 一八七頁・八〇 東海出版社

日本は四邊環海、未だ一度も外敵を國土内に邀へて戦つた事がない。その爲か兎角日本人は戦時に際しても  
銃後の緊張を缺く嫌ひなしとしない。歐洲諸國では一年戦へば日常物資の窮乏を告げ、銃後國民の生活は強制的に戦時化される。之に比較すれば食糧資源に豊かな我國は、二年戦つた今日、我等の食糧は戦前と變りはない。之は喜ぶべきことではあるが又警戒すべきことである。

著者は云ふ。歐洲大戰でドイツはヴェルダンの要塞一つを陥れる爲に、皇太子軍八十萬の大軍を以てして五十五萬の戦傷死者を出し、しかも尙抜くことが出来なかつた。ソムムの會戦にはフランス軍の死傷八十萬と報ぜられて居る。我々は今日事變によつて大きな犠牲を拂つてゐるとは云へ、歐洲大戰に比して未だ未だ困難はこれからと云ふことが出来る。その上肝腎の食糧の點で非常な天恵を蒙つてゐるので、却て感銘が薄い感さへある。銃後國民は餘程緊りしないと長期戦の困難を克服することは出来ない。

昔から百里の途は九十里にして半すと云はれてゐる。今日我々は百里の途を漸く一步踏み出したに過ぎない  
困難はこれからである、と云つて銃後國民に警醒の聲を放つて居るのが本書大體の主旨である。

著者は最後に祭政一致こそ治國の大本なりと云つて、國民思想を統一し、日本民族の魂を喚び起して長期戦に備ふる爲に祭政一致の精神を唱へてゐる。行き詰つた日本の現状は祭政一致の精神によるの外打開の道はないとさへ云つてゐる。祭政一致の精神の内容については種々細かい説明が試みられてゐる。記述は講話體の平易なもので、ジャーナリスティックな魅力を有つた筆致は著者獨特のものである。

## 國 民 防 空 讀 本

内 務 省 計 畫 局 編

四六判 二一六頁・五〇 大日本防空協會

本書は、國民一般に防空常識を持たせるために、内務省計畫局が特に編纂したものである。この種の書は數多く出てゐるのであるが、國民一般が家庭用として普く備へ、防空一般常識を得るための懇切に行届いた本はさうないといつてよい。本書は正にさういつた目的のもので、意義のあるものといはなければならぬ。防空組織・燈火管制・防火・防毒・避難・救護等一切の事項に就て概括的に要點を捉へて説いてゐる。極めて便宜適切なもので、少くともこれ位の知識は國民一般が持つてゐるやうにならなければいけないのだと思ふ。青年諸君には勿論理解は容易であらうが、これをもし諸君の家庭に持ち込んで、諸君の親達や婦人の人たちにまで容易に理解されるやうであつて欲しいものと思ふ。それにしては今少し叙述が平易でありたいものだ。



## 大陸國策現地に視る

朝日新聞社編

四六判 三五四頁 一・〇〇 朝日新聞社

東西朝日新聞社より派遣された十一名の特派員が、中南支・北支蒙疆・朝鮮滿洲の三班に分れて、現地の實情を視察報告したものが集つて本書となつたのである。まさしく新聞記事の集りであるが、それだけにいかにもびち／＼と躍動したそのまゝの姿を傳へてゐる。

我々は大陸の現地がいかにやうな姿のものであらうかを目に見るやうに知りたいのである。そのためにはこのやうな記事を貪り讀む。本書のやうなのはまさにニュース映畫でも見るやうなもので、我々は具體的にその姿を捉へ、動いてゐる鼓動を聞く思ひがするのであるが、しかし何といつても新聞記者諸氏の見聞であるから、その捉へた範圍だけのもので、ある事柄について全體纏つた知識を得るといふわけには行かない。その點物足りないといへば物足りない譯であるが、讀物としては實に生々としてゐて面白いのである。

## 興亞經濟を描く

東京日日新聞社經濟部編

四六判 二六二頁 一・五〇 一元社

本書は東京日日新聞が「興亞經濟と日本」といふ題で、國策の第一線に立つ諸名士の興亞經濟に關する抱負經綸を連載發表したものである。内容は十一章から成つてを、財政・金融・資源・重工業・化學工業・紡

績・農牧・電力・貿易交通・中小商工業等に關して十一章に分れ、各方面の實際家、専門權威者の意見を網羅してゐるのである。池田・賀屋兩前藏相も陣頭に立つて、聖戰下の我が經濟を語つてゐる。

誠に編者の言の如く、第一線にあつて銃後建設の役割を果してゐる人々は如何なる抱負經綸を抱いてゐるものであらうか、机上の空論を離れて現實にこの非常時局を正視し、これに身命を抛つてゐる人々の意氣込は如何なる底のものであらうかは、我々國民の總てが聽かんと欲するところである。

## 歐洲の内幕

ジョン・ガンサー著  
大江專一譯

四六判 三六一頁 一・四〇 今日の問題社

ヒットラーもムツソリーニも、チエンバレンもドラダイエも、フランコも又スターリンも、何れも「歴史を作る」人々である。ヒットラーの擡頭、ムツソリーニの躍進、そして歐洲の地圖は一年毎に更改されて行く。國際聯盟の破綻、獨逸の合邦、スペインの内亂、地中海上の均衡勢力、ローマ・ベルリン樞軸等々、歐洲の天地はまことに目まぐるしく私共の前に展開せられて行く。

原著者ガンサーは米國のシカゴ・デイリー・ニューズと云ふ大新聞の歐洲特派員で、この目まぐるしい歐洲でこの「歴史を作る人々」と接觸し、觀察し、譯者の言を藉りて云へば「永い間世界的芝居の特等席を占めて來た人である。だから彼が一度本書を公刊するや、たちまちに數十版を重ねたと云ふことである。」



この譯本は原著の完譯ではなく抄譯であるが、獨・伊・英・佛・ソ等の重要な記事は落ちなく譯出されてあるし譯者はこう云ふ方面の著書の譯出には巧みな技術を有つて居られることで既に定評がある。故に讀んでみて翻譯書としてのぎこちなさが少しもない。唯原著者が日本人ではないと云ふこと、何事にも自由を愛好するアメリカ人で、然も第三者としての樂な立場からヒットラーを論じ、ムツソリーニを語つて居ることを忘れてはならない。

聖戰こゝに二年有餘、東亞新秩序建設の大業は着々と進められつゝあるが、新興ドイツ及びイタリーと防共ブロックを形成してゐる今日、歐洲の動きは種々なる形に於てわが國に影響するのである。われわれは今日歐洲の一舉一動にも無關心であり得ない所以もこゝに在る。この意味で面白く讀める歐洲國際事情解説の書として本書を諸君に進める次第である。

## 滿蒙開拓青少年義勇軍

朝日新聞社編

四六判 二四八頁・五〇朝日新聞社

友邦滿洲國は建國以來五族協和、王道樂土建設を大理想として、着々と堅實な發展振りを示してゐるが、滿洲國と我が神國日本とは一徳一心、不可分の關係に立つものであり、この滿洲五族の中心となつて、王道樂土の建設を指導するものは東亞の盟主たる日本國民でなくてはならない。然して我が國は其の發展のため大陸に

進出する必要に迫られてをり、滿洲國は建國の理想を實現する爲に大和民族の渡滿を要望してゐる。こゝに日滿兩國は完全に一致して、手を携へて興亞の大業達成に邁進することになつたのである。

この東洋史上の一大轉換期ともいふべき重大なる時機に當り、政府は昭和十三年滿蒙開拓青少年義勇軍制度を創設し、純眞にして剛健なる青少年を大陸に進出せしめることにした。爾來一年にして、今や二萬を突破する元氣潑刺たる青少年が大陸に勇躍進出し、鐵の如き堅い精神をもつて建設の勞苦と闘ひ、黙々として萬難を克服しつゝ、この聖業に心身を捧げつゝある。

然し、この聖業に参加する青少年は單なる烏合の集團であつてはならない。茲に國費を以てこれ等の青少年に、内地に於て二ヶ月、現地に於て概ね三ヶ年、眞劍なる軍事教練と農事訓練とを施し、以て武士的精神と農民魂とを鍛鍊陶冶することになつた。

本書はこの義勇軍が、内地並びに現地の訓練所に於て、如何に教育され、訓練されつゝあるかを平易明快に述べたもので豊富に挿入された圖版と相俟つて、小冊子ながら良く義勇軍の全貌を傳へたものであり、青年諸君は諸君と同年輩なる義勇軍の青少年が如何に活動してゐるかを之によつて充分に知つて置くべきである。



歴史・傳記

荒鷲の母の日記

クニグンデ・リヒトホオフエン著  
濱野修譯

四六判 三三九頁 一・六〇 改造社

過ぐる歐洲大戰の折、空の蛭龍の名をほしまゝにした獨逸空軍の華リヒトホオフエン兄弟の母の日記である。兄はマンフレッド弟はロタル、兄弟の饒勇ぶりは兄マンフレッドが八十機、ロタルが六十機、兄弟合せて敵機撃墜百四十機と云ふ記録に依つても思はれよう。殊に兄マンフレッドは現ナチス空相ゲエリング元帥の前任指揮官で、リヒトホオフエン飛行中隊の輝やかしい精神は、今日ナチスの空軍中にその儘傳承されてゐると云ふ。マンフレッドは歐洲大戰の最後の年、單獨敵機を追ふて遂に行方不明を傳へられたが、程經て英軍の飛行機は獨陣地に飛來して美事な花環と共に一書を投下し、勇士マンフレッドが英陣地で撃墜された事を報じてその死を弔うたと云ふ佳話さへ傳へられてゐる。

この日記は歐洲大戰が勃發し、兄弟相次いで出動命令を受けた時に始まり、大戰最後の年、聯合軍に一步も譲らざる戦闘をつゞけながらも、國內の思想的動搖の爲に遂に敗退するに至る迄續けられてある。その間兄弟が、東部戦線に、西部戦線に轉戦また轉戦、名譽ある男爵リヒトホオフエン家の名を不朽ならしめた幾多の勳功が語られると共に、銃後國民が衣食を節して第一線將士と勞苦を一にした所が洵によく描き出されてゐる。読み物としても面白いが、所謂獨逸魂をこの中より汲み取り他山の石とするにふさわしいものである。

先人を語る

本多熊太郎著

四六判 二七五頁 一・六〇 千倉書房

山縣公の追憶、伊藤公爵と松方老公、桂公爵を偲ぶ、山本權兵衛伯、寺内正毅伯、巨材明石將軍、後藤新平伯、私の原敬觀、小村侯の思ひ出等を内容としたものである。何れも著者が直接接し、或は指導を受けられた明治大正の巨人と謂はれ傑士と稱へらるゝ人々で、殊に著者は小村侯爵に親炙した人であるだけに、小村侯について語られた所は量から云つても最も多いが、又感銘を受ける處も最も深い。

著者は獨逸大使を最後に外交官としての第一線を退かれ目下野に在る人であるが、その稜々たる氣骨を以て外交官界には異色のある存在として名のある人である。日露役講話には小村侯に隨行して活躍されてゐる。本書にも著者の烈々たる氣魄がよく現はれ、青年諸君への讀物としては誠に適當である。

ロシア侵寇三百年

本山桂川著

四六判 三三六頁 一・五〇 實業之日本社

ロシアが三百年の昔にシベリヤを攻略して、樺太・千島に侵入して以來、ロシアの採つた東方政策は必然的

66  
1



にわが國策と對立して、兩國は相戦ふ可き宿命を負はされることになつた。三百年の泰平を鎖國の牆の中に過してゐた幕府にとつて、諸外國人の渡來は寢耳に水の驚きであつたが、就中、ロシアの船隊が千島・樺太を掠め更にプチャーチンが長崎に入港するに及んでその周章狼狽は甚しいものがあつた。然しかゝる開國初期に於けるロシアの壓迫、わが國の樺太放棄の如き悲しむべき問題も、明治三十六七年戰役に於て、その陸軍を奉天に大敗せしめ、その海軍を對馬海峽に殲滅して屈服せしめるに及んで、名實共にロシアはわが國の下風に立つに至つた。歴史を繙く時わが國威の振張は固よりのことながら、轉た今昔の感なきを得ない。嘗て滿洲をその足下に踏まへんとしたロシアは今や退いて、外蒙の一角に據り、わが皇軍と衝突して痛撃を受けつゝある。主客顛倒と云ふべきか、ロシアは次第にわが國の大陸進出に壓され、國境を守るに汲々たるものがある。本書は三百年間に互る日露の多事なりし交渉の跡を辿り、さうした歴史の流れを通して、わが國の躍進の姿を示してゐる。日露間の宿命的な衝突の歴史について我々は充分知つてをくべきであり、本書はその意味で極めて平明に書かれた本として一讀すべきである。

## 朝陽門外

清水安三著

四六判 三六七頁 一・三〇 朝日新聞社

北京朝陽門外における貧民街にあつて崇貞學園なるものを經營し、支那の貧民子女のために二十年間奉仕の

活動を續けてきた清水安三氏の自傳である。氏は今や「北京の聖者」などといはれて誰知らぬものもない存在となつてゐるのであるが、この度の事變に至るまで誰ひとり知るものもない存在であつた。

この自傳は實に率直な、赤裸々な記録である。自らの半生を告白し、學園の事業を紹介し、前夫人の生涯並に現夫人を語つてゐる。氏は「聖者」などいはるべき人ではない。あくまでも活動の人であり、事業の人であり、奉仕献身の社會人である。それがやはり嚴としてキリスト教的信仰の上に立つてゐるのである。謂ゆるキリスト教徒らしからぬキリスト教徒である。氏は自ら東洋的キリスト教を標榜してゐる。

氏には毀譽褒貶半するやうであるが、恐らくは誤解に基づくところがあるのではなからうかと思はれる。本書を讀めば氏の正直な、率直な、献身的精神は疑ふべくもないやうである。我々はこれに打たれ、そしてこのやうな人こそ興亞の大業を背負ふわが國にとつて今後彌々重要なのであることを痛感せざるを得ないのである。青年諸君の必讀を要望したい。

## 國史通記

西田直二郎著

菊判 二三七頁 一・五〇 積善館

本書は元來中等學校の高學年を標準として書かれた教科書であるが、廣く一般國民へ國史の通念を與ふる上にも適當せるものとして國民版として刊行されたのである。従つて記述の方法並に體裁は教科書的であるが、



極めて大擲みに我國文化の進展、政治形態の變化を示し、國史の通念を與へて居る點に於て國民版の名にふさわしい。中等學校初學年の教科書に見る様な事件を主とした記述でないので、讀んで居ても個々の問題に煩はざるゝことなく、國史を一貫して流るゝ所謂日本的なものがよく窺へて誠によい。座右に備へて置いてよいのではないかと思ふ。

### 吉 田 松 陰

中 里 介 山 著

特小判 二八九頁・七五 大菩薩峠刊行會

松陰先生は安政六年十月廿七日、千住小塚ヶ原に於て斬首の刑に處せられ、三十年の短かい生涯を終へて居られる。だがその門には幾多の英傑を生んで、先生の皇室をおもひ、國を憂ふるの烈々たる精神が昭和の今日に於ても猶生きて居ることは今更云ふ迄もない。

先生は天保元年長州萩の城下杉百合之助の男として生れた。六歳の時出で、叔父吉田大助の家を嗣いでゐる。吉田家は代々毛利藩の兵學師範で、山鹿素行の學流を汲んで居た。先生が有名な松下村塾を開かれたのは下田で米國軍艦に塔乗渡海を志して成らず、その爲に藩に禁錮せられてから後のことで、この時年二十七歳であつた。松下村塾で門弟を養ふこと二年餘り、安政五年十二月五日（二十九歳の折）投獄の令下り、幕府の取調べを受けて翌六年十月二十七日遂に受刑されたのである。

この本では先生十一歳の天保十一年、藩公毛利敬親の前に家の學問たる山鹿素行の武教全書を進講する所から筆が起され、安政六年の刑死に及んでゐる。その間、騒然たる幕末の世相の中に、毅然として擢んずる先生の思想が誠によく描き出されてゐる。尙著者は緒言の中に、特に青年の修養に資する讀物たることを念頭に置いて執筆されたことを云つて居られるが、その點からもこの本は諸君には最もふさわしい讀物であると思はれる。

### 地 誌 ・ 紀 行

### 若 き ド イ ツ

朝 比 奈 策 太 郎 著

四六判 二二七頁 一・二〇 羽田書店

昭和十一年の暮、當時柏林駐劄帝國大使であつた武者小路子爵を通し、ヒットラー・ユーゲント當局からわが青少年代表を獨逸へ招待したいと云ふ申入れがあり、之に對してわが國に於ても又獨逸側を招待して、相互に交驩訪問をなすことに決定し、昨年その實現をみた。この壯舉に参加し、五月二十七日新緑の祖國を後にして一路訪獨の旅にのぼり、約半歳に亘つて獨逸各地を視察し、盟邦獨逸の眞の姿を把握し、兩國親善の楔を一層堅くしたのは、一行三十名よりなる大日本青少年ドイツ派遣團であつた。そして團長として一行を引率した



のが本書の著者である。

本書はその滞獨中に於ける見聞、體驗を記したもので、一行が入獨以來いかなる行程を取つたか、或は何を感じたか、暢達平明な文章で綴られてゐる。ヒットラー・ユーゲントに關する圖書は既に數冊刊行されてゐるので、その青少年團の紹介は必ずしも珍らしくはないが、流石に、親しく之に接してこられただけあつて、いかにも彼等の姿が生々と躍動して描かれてゐるのは類書に見られない所である。

## 大陸支那の現實

藤田元春著

四六判 三八〇頁 二・五〇 富山房

支那を知ると云ふことは今日最も大切なことの一つである。その知り方にも色々ある。政治的に知ること、經濟的に知ること、産業的に知ること、何れも必要である。だが最も根本的には先づ地理的に之を知ることである。それから歴史的に之を知ることである。

この本は大陸支那を地理的に扱つたものである。所でこゝに謂ふ所の支那は即ち中華民國ではない。純粹に地理學的に支那と云つたので、滿洲、内外蒙古をも含めた極めて廣い、亞細亞大陸の東方斜面を指すのである。内容は二つの篇に分つてある。第一篇は通説と云つて、支那の版圖、地形及び構造、氣候、動植物、住民、産業、交通、言語、宗教等を、第二篇は地方誌で、大支那を十一の地方に分つて細説して居る。但し滿洲國だけは

は一項獨立せしめて附篇として述べられてある。

記述は極めて平易であるが、何と云つても非常に廣い支那の地理を網羅的に述べてゐるので、箇々の記述は幾分粗雑に陥り勝ちで、讀み物としての興味が削がれる嫌ひなしとはしないが、これはこの小さい本としては通れ得ない處であらうと思ふ。寧ろあの廣い大支那を、この小さい本にまとめ上げた處を買つて、この本を大方諸君に薦める次第である。

## ソ 聯 報 告

布施勝治著

四六判 二九三頁 大阪毎日新聞社

支那事變の終局は全く豫測すべからざるものであるけれども、皇軍は北支中支をその掌中に收め、廣東を把握して、磐石の如き布陣はいさゝかも揺がず、着々として建設工作が進捗しつゝある。或は支那遊撃隊の蠢動なしとはしないが、それは直ちに殲滅の運命を吃するに終るのみである。かゝる時、俄かにソ聯は外蒙軍と聯合してハルハ河畔より滿洲國へ越境を企て、皇軍に對して挑戦を試みんとし、端なくも彼我の間に激しい死闘が交されることになつた。既に新聞紙の報ずる所によると、わが空軍の撃墜せる敵機は七百臺を突破し、敵地上軍の蒙れる損害は莫大なるものがあると云はれる。固より勝敗の數は初めより明瞭ではあるが、先の張鼓峰事件といふ、今回の挑戦といふ、ソ聯がわが國に對して何等かの敵對行動を常に企てつゝあることは云ふまで



もない。我々はこの際ソ聯の正體をしつかりと理解して置くことは缺くことの出来ないことであると思ふ。  
本書は明治四十五年以來入露七回、通信に、評論に、わが朝野の對露認識の確把に多大の貢獻をした著者がそのロシア專攻の該博な知識と犀利な觀察力を以て、現在のソ聯を解剖して我々のために示したものである。初めにスターリンとその一黨を描き之に對立せんとする一派を紹介することによつて、トハチエフスキー事件あの血惺い肅正工作の大殺戮を行ふに至つた顛末が詳細に述べられてゐる。結論として、然らばソ聯はわが國と一戦を交へ得るやの問題に對し、以上曝露せる實情によつてソ聯にその力無きことを説き、しかしその國土富み、資源は豊かであり、且つ軍を構成する兵卒は無智無邪氣、非常なる忍耐力を有するが故に決して容易に安心すべきでない」と述べてゐる。

孤

獨

大江一專 一 下 著  
大 江 一 專 一 下 著

四六判 三四八頁 一・五〇 大東出版社

バード少將は極地探險家として世界屈指の經驗家であつて、一九二六年には飛行機によつて北極を横斷、二八年には南極に飛び、リットル・アメリカを發見し、翌二九年同じく飛行機によつて南極に到達した。更に三年再度南極に向け出發、リットル・アメリカを基地とし、これよりトラックで二日行程を南下して、ロス氷原の氷雪の中に前進基地を設け、單身こゝに籠城して、極地の氣象と極光の觀測に従事した。本書はこの時の

記録で、彼の不屈不撓の意志力と信念とを如實に示してゐるものである。

一行が根據地リットル・アメリカに到着したのは、南極の冬が始まる三月であり、隊員は零下七十度に達する嚴寒の中に小屋を建設し、バードはこれより約四ヶ月、單身この小屋に起臥し、觀測に従事したが、その記録をとるために如何に努力したかはこの記録の各頁に見られる。特に最後の二ヶ月半は石油ストーブから洩れる瓦斯のため起臥に不自由する程に衰弱したが、根據地とのラヂオ通信にも一切之を報告せず、不屈の意志力を以て病と闘つた。バードのこの記録は探險家に對して我々が想像するやうな粗剛なものではなく、人生に對する澄んだ心境と濃やかな美しい感情を盛り湛へた優れたものである。

海南島讀本

南支調查會編

菊判 二〇三頁 一・〇〇 南支調查會

わが陸海軍の精銳が疾風迅雷の如く敵前上陸を敢行、忽ちその要衝を占領して全島の死命を掌握したのは東亞の情勢に一新紀元を劃するものであり、實に支那海の咽喉に位する海南島が日章旗の翻るところとなる時、わが國は東洋の支關にどつしりと腰を下した感がある。在支權益の擁護に今更の如く狂奔し、援蔣工作に日も維れ足らぬ第三國もこゝに頂門の一針を打ちこまれた感があるであらう。然も單に海南島は軍事上の一大要點であるばかりでなく、又實に豊富なる資源を未開發のままに埋藏する大寶島である。優に臺灣を凌ぐと云はれ



るこの島の開發は一にわが國の手を待つて行はるべきであらう。由來、同島關係の資料は極めて乏しく、其の多くは數年前もしくは十數年前、民國政府又は二三外人の不完全な調査資料に基いたものである。本書は南支調査會が一般國民をして同島占據の意義を正しく理解せしめ、わが南進政策の意義を闡明するために調査研究の成果を示したものである。しかも平易簡明に島情を紹介し、開拓經營を主眼として執筆されてゐるのは本書の長所である。

### 體 育・衛 生

#### 劍 道 讀 本

野 間 恒 著

菊判 二四八頁 一・二〇 大日本雄辯會講談社

劍道は大和民族特有のものであつて、刀劍を使用して戰鬥する技術を練磨し、敵に勝利を得ることから出發したのであるが、歴史的發達を重ねた結果、武士道と密接な關係をもつことになり、武士道的な人格修養の道となつた。即ち武術としての本來の目的は第二次的になり、人格陶冶といふことが第一の目標となつた。昔の劍の達人が精神的に如何に優れてゐたか、屢々物語に傳へられるところである。されば學校教育にも劍道を正課として取り入れ、體育と同時に學生生徒の精神力の養成に努めてゐる。本書は二十六歳で天覽試合に優勝の榮冠を戴き、三十歳で教士號を授與された著者が、劍道の精神とその技術の兩面に互つて平易に劍道の極意、奥儀を述べたものであるが、誠意のこもつた立派な内容である。青年諸君が、劍道を學ばれるには非常に優れた參考書であると同時に、人生に處する精神的なものを得ることの出来る良書である。

#### 結 核 は 必 ず 癒 る

厚生省 保險院 編

四六判 四〇三頁 一・〇〇 新潮社

昨年十二月、厚生省は懸賞を以て、結核の重患を征服した人達の尊い記録を求めたが、應募した二千六百四十篇の中から審査委員が慎重に審査したものの三十篇を收めて本書が出来た。現在わが國で一年の結核死亡数は約十四萬人、患者数は約百四十萬人、患者候補者はその十倍もあり、國民の大半は結核菌感染済みと考へられるさうである。それ故に一生涯結核菌と關係なしに終る者は無いといふ位に結核は國內に蔓延し、全く國民病の觀があるが、然しその割合には死亡者は少い。それは人間の身體には結核菌を排撃し、結核病を征服する力が自然と備はつて居るからである。しかし癒るにしても、自然と癒つた人もあるが、苦心慘愴して、種々工夫精進の結果可なり難症を克服した例が澤山ある。此の種の體驗は誠に貴重なるものであつて、現在結核に悩んでゐるものにとつて絶大な慰安となり、療養進路の燈明臺となるものであらう。さうした人達のためには是非本書を讀ませたいものである。



萬人のための科學史

松平道夫 著

四六判 三一五頁 一・五〇 日本公論社

地球が圓いと云ふことは可也昔から考へられてゐたことであるが、コロンブスがアメリカ新大陸を發見し(西曆一四九二年)、マゼラン及その部下がスペイン王の援助の下に世界を一週(西曆一五一九—一五二二年)してからと云ふもの、愈々地球の圓いことが確認されて來た。この邊を大變轉期として世界の歴史は一廻轉して俄に近代となり、科學の進展頓に加はるに至つた。故に近代史は正にコロンブス・マゼランのあたりから胚胎したと云ふことが出来る。そしてその最も特質とする處は科學の勃興と云ふことである。

この本は題名の示す通り萬人向きに書かれた平易な科學史で、勿論ギリシヤ、ローマ時代の古い科學も若干述べられてあるが、右の様な次第でコロンブス・マゼラン以後が詳しく取扱はれてゐる。これを讀むと或時は神を恐れない人類の科學精神がまことによく窺へる。だが宇宙の現象は人類の科學精神だけでは解明しつくされるものではない。科學以上の精神現象が幾多存在することを忘れてはならない。然しそれにしても今日の日本人には餘りに科學精神がなさ過ぎると云ふのが一つの批判である。その爲に本書の様な、幾分平易に過ぎるのではないかと思ふ様な科學史を提供する次第である。一讀をお薦めする。そしてこれが縁となつて、より以上の優れた科學書に向はれんことを希望する。

趣味の世界數學史物語

鏡淵稔 著

四六判 三四八頁 二・〇〇 啓文社

先づ著者のはしがきを窺いて見ると、「從來、兎角數學はむづかしいもの、面白くないもの、嫌なもの、代表と考へられて來てゐるやうであります。數學の中にはむづかしいことも尠くはありませんが、決して、その様なものばかりではありません。日常生活に極めて重要であると共に、頗る興味のあるものであります。」とある。この頗る興味のあるものであることを知らせようと云ふのが本書執筆の本來の目的のようである。

そこで本書ではギリシヤの大昔からニュートンとかライプニッツとか云ふ比較的近世の大數學家迄、それに日本の算盤の大先生毛利重能、吉田光由、關孝和と云ふ三人の世界的數學者を加へて之を歴史の年代順に挿話を交へて面白く數學の本旨を理解せしめようとしたものである。高等科二年の算術書に、有名なピタゴラスの定理と云ふのがあるが、之が今から二千年以上も昔に既に出來上つてゐたと聞かされては驚くの外はない。總じて數學上の大發見は近世よりも古代に多い。そんなこともよく本書に示されてゐる。元來この本は小學校の兒童のために數學の面白さを知らせる爲に書いたと著者は云つてゐるが、小學生には少しむづかし過ぎる。寧



ろ高等科を出た人、或は中學校や青年學校に在學中の人々にすゝめるのが適當である。日常生活と關聯せしめて仲々面白く出來てゐる本である。

## 文學

### 建設戰記

上田 廣 著

四六判 二四九頁 一・〇〇 改造社

上田廣氏は山西省の同蒲線の鐵道部隊員として従軍、既に「黃塵」その他事變に取材した作品を發表して、火野葦平と並び稱されてゐる。「建設戰記」は氏が發表した作品中最も優れたものであつて、わが鐵道部隊が前線部隊へ食糧・彈藥或は郵便物を運ぶために、如何に辛苦して鐵道を守り、列車を護るかど如實に描寫されてゐる。

鐵道部隊がその任務の遂行に當つて、最も困難を感じるのは敵軍の間斷なき來襲である。しかも敵は容易にその姿を示さず、秘かに線路を破壊し、橋梁を爆破して、鐵道部隊の前進を妨害する。部隊は直ちに破壊された線路の修理に着手するが、この作業の最中を狙つて、初めて敵はその姿を有利なる地勢によつて現はし、作業中の部隊を襲撃する。一方には作業を繼續し、一方にはこの敵軍に當り、これを撃退する部隊の二重の辛苦は我等の想像を絶するものがある。しかも本書に描寫されてゐる將兵はいづれも死と直面して微塵もたぢろがない不敵の魂の持主で、彼等の無雜作な、常に諧謔にとんだ行動と、しかもその底に流れてゐる必死の誠實さがいづれの頁にも躍動して描かれてゐる。

### 宮澤賢治名作選

松田 甚次郎 編

四六判 五七二頁 三・〇〇 羽田書店

宮澤賢治といふ名は今でこそわが國で最も優れた詩人の一人であり、職業的な童話作家の夢想だにもしなかつた童話の世界を描いた作家として驚異と感謝の念を以て傳へられてゐるけれども、實に最近まで誰も知らなかつた。否、彼はその死後、はじめて知られたのであり、生前は岩手縣花巻農學校の教諭であり、東北の片隅に生活してゐたのにすぎない。その作品がいづれも未發表のまま、篋底に深く藏されてゐた。そして彼の友人達によつてそれが全集として初めて世の中へ現はれた時、わが文壇は驚きの聲をあげたのである。しかし少數の人ではあつたが彼の影響はしつかりと傳へられてゐた。即ち「土に叫ぶ」を出してこゝに農村の自覺せる典型的な青年のあることを示した山形縣鳥越部落の松田甚次郎氏は彼の精神的な弟子であり、彼の思想の實行者であつた。農民藝術こそは彼が終生努力した仕事であつた。彼は都會的な文學を書かなかつた。農民の心を心とし、その生活感情を彼の藝術の中へ持ち込んだのである。常に山林を唄ひ、耕作地を歌つた彼の詩は東北の



雪に埋れた風物の陰鬱さははらんで、しみじみと心を打つものがある。その童話は巖谷小波、鈴木三重吉の童話の傳統に、更に東北の風土、土俗の産物を加へ、藝術的な匂ひの高く香るものである。青年諸君は彼の中に自分達の知己を見出すに違ひない。良い本である。

### 津 輕 の 野 づ ら

深 田 久 彌 著

四六判 三二二頁 一・二〇 改造社

著者はわが文壇の中堅作家であつて、現在最も活動してゐる一人である。然も著者の長所はわが國の文學が作者の心境や、社會の薄暗い、慘めな世界に執着してゐる時、之を打破して、健康な、明朗な息吹きを文學に持ちこんだところにある。然しそれは決してたはいのないユーモア文學の明朗性ではない。鋼鐵のやうな強い同時に素朴なものを漲らしてゐる作品である。著者は文壇第一の山嶽通であると云はれる。そして著者の山登りは又單なるスポーツとしてのそれでない。素朴な自然を愛し、眞實に人生を生きて行く道を汲みとらうとするためである。この氣魄が何處までもその作品の中に底流してゐる。本書は著者が初期に書いたいくつかの作品を收めたものであるが、書名になつてゐる「津輕の野づら」はその中の代表作で、津輕平野で林檎の栽培に従事してゐる一群の少女達を描き、人の世の困苦を乗り越える逞しい神精を述べたものである。その外どの一篇をとりあげるも著者の創作精神に變りはない。

### 鐵 血 陸 戰 隊

新 潮 社 編

四六判 三〇二頁 一・一〇 新潮社

今度の事變で前線に活躍する皇軍將兵の姿を描いたものが相次いで刊行され、銃後國民にとつて、孰れも強い感銘を與へてゐるが、陸軍に關するものが大部分であつて、海軍のものは甚だ尠い。本書はその海軍將兵を書いたもので、就中、上海市街戦は我等の切に知りたく思ふものであるが、本書には陸戦隊の必死の戦闘が活寫されてゐる。各篇いづれも讀賣新聞に掲載されたものである。

上海市街戦記(一)	海軍少佐	名村利正
上海市街戦記(二)	海軍兵曹長	園畑嘉太郎
厦門攻略記(一)	海軍特務中尉	鬼塚采雄
厦門攻略記(二)	海軍大尉	大野傳
長江作戦記	海軍一等兵曹	楠見義安
連雲港攻略記	海軍三等兵曹	古屋篤



幕末愛國歌

川田 順 著

四六判 三八八頁・七八 第一書房

著者は竹柏園門の現代有数の歌人である。また非常な努力精勵の學究でもあり、さきには「吉野朝の悲歌」といふ勞作を公にせられ、續いて今又この困難な幕末維新志士の愛國歌評釋書を公にせられたのである。

この書の中樞は事件別によつて選集した「幕末愛國歌珠玉選」といふのと、佐久良東雄・平野國臣・久坂玄瑞・野村望東尼等十二人の傑出せる人達の歌を選出して一首宛解説した「主要作者篇」といふところである。これらの他の人々數十人について大抵一首宛選び右のやうに評釋した「一般作者篇」といふところである。これらの諸篇をよく味つて讀めば志士の歌の佳什は略々盡したといつてよく、その眞髓を理解することが出来るのである。

志士の歌は文學として見てはつまらないといふのが一般歌よみたちの通説であつたが、著者はこの勞作を試みて然らずと斷定したのである。正に一片烈々の誠心は凝つて名作をなし、永遠に日本人の胸を打つて止まないものがあるのである。

呼び出しの聲待つほかに今の世に

待つべき事のなかりけるかな

今や刑に處せられんとする吉田松陰のものする一首である。

時局柄かゝる優秀な愛國歌評釋書を得たことを喜び、青年諸氏の愛讀を望むものである。

土に祈る

相馬 御風 著

四六判 二三〇頁一・六〇 人文書院

相馬御風氏の最近の隨筆集である。氏の隨筆は青年諸氏にもお馴染のことであらう。二十年間郷里越後の田舎町に住んで、今は全く土の人となつてゐる。この隨筆集の中には郷土に老境を迎へた人のつゝまじやかな沁沁とした感懐が溢れられてゐる。著者は切實敬虔な氣持で事變の響をきき、郷土の人たちを眺めてゐる。所々に自作の感激に満ちた詩歌を入れてゐる。この一巻は事變下の農村隨筆といつてよい。銃後の農村は他に幾多の報告や記録もあるわけであるが、この書のやうな老詩人の心境に映つた銃後農村の姿はまた格別である。諸君も定めし感涙を催しつゝ讀み、己れの姿をそこに反映して一入の懐しさを覺えることであらう。

愛國詩集

佐藤 惣之助 著

三五判 二四六頁・九〇 むらさき出版部

その豊かな詩情とその自在な詞華とによつてわが詩壇に重きをなしてゐる著者が、支那事變勃發以來、胸に漲る愛國の意氣禁じ難く、或は從軍して皇軍將士の勞苦を見聞し、或は銃後の愛國運動に参加して、その間、



その殉情を皇國に捧げる覺悟の下に、綴られたものがこの詩集である。「世界の日本」「戦火の下に」「皇國の華」の三部に分けられてをり、世界の日本、皇國の春、興亞の春、新東亞建設の歌、大陸青年の歌があれば、壯絶！敵前上陸、空爆荒鷲艦隊、架橋の人柱、杭州灣敵前上陸の戦線を歌つたものがあり、又、殉忠乃木、大楠公頌歌、山内中尉の母、噫軍神西住戦車長等の護國の英靈を讃へたものがある。既にラジオで放送され、レコードに入れられてゐるものもあり、青年諸君が或は歌つて居られるものが收められてゐるかも知れぬ。小型で携帯に便であり、座右に置き愛唱すべき詩集である。

## 征 野 千 里

谷 口 勝 著

四六判 二七〇頁 一・〇〇 新潮社

一上等兵として聖戦に應召し、北支の征野を馳驅するや、忽ち杭州灣に上陸、南京城の攻略戦に参加、一轉して徐州包圍戦、續いて漢口へと進撃の途上、名譽の戦傷を受けて後送される迄、名實共に千里の征野に轉戦した間の體驗記であり、兵卒によつて録された従軍記として江湖の絶讃を博し、十八萬部を刊行したものである。同じく貴い體驗記であるにしても、例へば火野葦平、上田廣兩氏の作品の如きは、その内容の誠實さに於ては些も變りはないが、文學作品として磨きあげられたるものをもつてゐる。これに對して嘗て文筆を手にしたことのない兵卒の記録したものには、その稚拙なる表現にも拘らず、又別種な意味で、流露する眞實の人の

心を激しく感動させるものがある。

本書を貫いて流れてゐるものは、同じく相並んで死生の巷に出入する將兵が互に抱く美しい友情の世界であつて、殊に喇叭手である上等兵と、看護兵である伍長と著者の三人が醸し出す、涙ぐましい、又諧謔に富んだ雰圍氣はその純粹さの故に尊いものである。

遂に喇叭手は戦死し、残る二人は共に戦傷して後送されるに至るのである。戦争文學固より讀むべきである。しかも本書の如き實録に近きものも又大いに讀まれるべきであらう。

## 脇 坂 部 隊

中 山 正 男

四六判 三六四頁 一・〇〇 陸軍畫報社

敵首都は既に重慶に移されてをり、皇軍は漢口を抑へて微動だにもしない。わが空軍は反覆重慶を爆撃して世界一空軍の名に背かず眼醒しい効果をあげつゝある。しかし翻つて思ふ時、懸軍萬里深くも敵を追ひつめたるもの哉の感の切なるものがある。上海の市街戦、蘇州河の持久戦、それからあの世界を驚嘆せしめた大膽な杭州灣の敵前上陸、當時我々は新聞やラジオに緊張したのも遠い昔のやうな氣がする。敵首都南京へと皇軍が進撃を開始した時、いかに敵が激しい抵抗をするであらうかと我々は氣が氣でなかつた。陥落は固より時間の問題でしかない。然しその爲に拂ふ犠牲を考へる時、我々の心は必ずしも明るくはなかつた。しかし怒濤のや





うに凄しい皇軍の進撃力はどうかであらう。南京城の城壁はみる／＼撃ちまくられた。皇軍は雪崩をうつつて城内へ突入した。我々はあまりの呆氣なさに拍子抜けがした。しかしそれはニュースだからである。この成果を生むために將兵が如何に死闘したかは言語に絶するものがあつたのである。本書は光華門、即ち南京城の一番乗りをした脇坂部隊の岸中隊のその死闘を描いたものである。まづ蘇州河の戦闘から筆が起されてゐる。中隊はこの時岸隊長を失つた。中隊は山際少尉によつて指揮をとられた。光華門の城壁奪取に中隊は新隊長伊藤大尉を更に失つた。然して山際少尉は全滅に瀕せる中隊で生き残つた数人の一人であつた。朝香宮殿下から少尉に軍刀が御下賜された。少尉は中隊を代表してこの光榮を拜受したのである。實に中隊はその團結心と隊員の至誠至情に於て皇軍の典型である。本書は残すところなく中隊の氣魄を傳へてゐる。涙なくし讀了し得ない本である。

## 北岸部隊

林 芙 美 子

四六判 二四九頁 一・〇〇 中央公論社

所謂從軍ペン部隊の一人として戦線へ行つた著者は、大部分の作家達が九江から歸國した後、揚子江の北岸を漢口へ進撃する部隊に従軍して、漢口まで行つた。本書はその時の忠實な日録である。地方の青年諸君も既に知つてをられることと思ふが、著者は女性作家にめづらしい無雜作な生活態度と肌の細かい抒情の美しい作

品をみせる人で、さうした長所が、戦争と云ふどこか激情的なものと結びついて、稍感傷に流れ過ぎてゐると云ふ缺點もないではないが、この優れた報告文學を生み出したものである。もとより本書は火野葦平などの書くやうな戦争の修羅場を描いてはいない。しかし前線の直ぐ背後にゐて、砲の撃ち合ひの響きをきき、又は生しい敵の屍を眼のあたりに眺め、或は戦場を馳驅する將校や兵隊や、軍馬などを、女性らしい濃やかな情感を以て描寫してゐる。黄塵を被つて北岸部隊が一步一步と前進して行く、その路傍の草の花も、虫の聲もそれから日の光も一つも洩らさず描いてある。嘗てラジオで放送されて、皆を感動させた梅村少尉の話、死の床に横はりながら、なほ「傳令、傳令」と叫ぶ満身を祖國に捧げつくしたあの少尉の物語はこの中の一節である。兵隊は皆、著者に親しんで「林さん」と呼んださうである。よい報告文學としてお薦めする。

## 支那事變歌集

齋藤 茂吉 選  
佐木 信綱 編  
讀賣新聞社  
四六判 二〇九頁 一・二〇 三省堂

支那事變歌集はほかにもあるが、手軽で安く買へる、そして割によく纏つてゐるこの集をお奨めすることにした。この集は讀賣新聞が懸賞募集して集めた非常時局歌の中から事變に關する歌を纏めたものである。前半は齋藤茂吉氏選のものであり、後半は佐佐木信綱氏選のもので、それ／＼戦地・銃後の兩篇に分れてゐる。



「古來、國家の事變に際しては、國民の熱誠の情が、歌となり詩となつて、渺からず傳はつてはゐるが、今次の事變のごとく、多くの歌が詠み出されたことは、有史以來はじめてと言つてよい。」と佐佐木氏は「序」の中に書いてゐる。事變歌集はまさしく新しき萬葉集の防人歌集である、吾と同じ鬚もありたり他部隊の埃にまみれ入り來る見れば  
今し河村部隊血戰記録むさぼり讀めど夫の御名なし  
これらは齋藤氏選の中に見られるものであり、  
盲ひたる白衣の身にも秋は來つふる郷のさま思ひいづるも  
みいくさに召されてはやも一とせの吾子想ひつゝ榮殻焼くなり  
これらは佐佐木氏選の中に見られるものである。我々はこの歌集を胸を痛めずして讀み得ない。青年諸氏の日常折にふれて讀み、銃後の力とせられんことを望む。

## 街

阿部 知二 著

四六判 四二八頁 一・八〇 新潮社

阿部知二氏はわが文壇では現在、最も人氣のある作家の一人であり、「冬の宿」「北京」の二作は特に有名である。就中「冬の宿」は映畫化され、良心的な映畫として好評を得た。「街」はその後、都新聞に連載發表

したもので、夏目漱石の「坊ちゃん」と比較して、「昭和の坊ちゃん」であると云はれてゐる。主人公が自分の信ずる道に猪突する所が非常によく似てゐる。

物語は東京の小市民街の藥店で、店主を失つた未亡人を助けて、同業者との競争に大童になつて活動すると共に藥種商組合の肅正のため孤軍奮闘する、愛すべき、ドン・キホーテの如き青年を主人公とし、之をめぐつて、有関的な知識階級や、都會の職業婦人や、古風な淑女を配して、單なる興味を追ふのではなく、寫實的に現代世相の一端を描寫した點がこの小説の優れたところである。

## 産 業

## 持 てる 國 日 本

大河内 正敏 著

四六判 一八四頁 一・〇〇 科學主義工業社

こゝに持つとか持たないとか云ふのは國防資源に關しての意味でその外の意味でないことは云ふ迄もない。所が一口に資源を持つと云つても二通りの意味がある。一つは素材としての天然資源で、も一つは之を實用化せしめる工業力である。例へば支那の様に無盡と云はれる程石炭を有つてゐる國でも、之を開發する工業力が充分でなければ、開發しただけの價値しかない。更に進んで假令石炭を埋藏することの少い國でも、石炭に代



る燃料を強力な工業力に依つて人工的に創造することが出来れば、一躍持たざる國から持てる國へ飛躍するこ  
とが出来ると。この様な筆法で持たざる國から持てる國へ飛躍した例が過去に幾つかあるのである。例へば二十  
年前には南米チリは天然硝石の産地として有名で、各國は競ふてチリ硝石を購入して火薬の原料とした。  
然し近代化學の進歩は空氣中に含まれる無盡藏の窒素を固定することに成功して、今日ではチリ硝石の商品  
價値は昔日の俤はなくなつて了つた。

著者がこゝに持てる國日本と云ふのはこの工業力を指して云ふのである。工業力を強大ならしむることに依  
つて現在は持たざる國日本であるが、持てる國日本への飛躍が確實に可能であると云ふのである。然も著者は  
今日代表的の科學者であるから、決して机上の空論を唱へて居るのではない。科學的の基礎を充分用意してこ  
の論を唱へて居る。

我々は國防資源に關する限り樂觀することは許されない。然し日本と云へば貧乏國と云ふ卑屈な觀念から開  
放されて、昂然「持てる國」への途を辿り得ることは何と云つても愉快なことに違ひない。但しこれが科學工  
業の振興如何が先決問題であることを最後迄忘れてはならない。記述は平易で仲々面白い。

## 戦時經濟早わかり

大阪毎日新聞社經濟部編

四六判 一冊約 八〇頁・二〇  
大阪毎日新聞社  
東京日日新聞社

この前本叢書を纏めて紹介しておいたが、その後に出たものを以下列挙紹介しよう。

○更生する中支經濟

○北支經濟の開發

○長期建設と農村對策

○國防と生産力

右の中初めの二冊は「支那建設經濟」に屬するものである。「農村對策」の方は、生産力の維持増進・國防資  
源の生産充實・貿易生産物の増殖・日滿支の農業ブロックの四篇から成り、「國防と生産力」の方は、戦争と生  
産力・資金調製・日滿支三ヶ年計畫等一般に長期建設と生産力擴充の問題を扱つてゐる。兎に角特定の問題に  
つき纏めて一般的なことを知るには便利な叢書である。

## 新農村の建設

朝日新聞社編

四六判 五六一頁・八〇朝日新聞社

本書は「大陸へ分村大移動」と副題されてある。いふまでもなからうが、分村運動とは一村一郷から百戸な  
り二百戸なり、或はそれ以上を計畫的集團的に滿洲國に送出し、新農村を建設することによつて滿洲國の健全  
な生長に貢獻すると共に、主として耕地面積の過小から来る日本農村の底知れぬ窮乏化を根本的に打開せんと



するものである。本書は前農林省經濟更生部長石黒武重氏の「分村運動の全貌」といふ簡潔にして要を得た全般的解説を巻頭にして、農村更生協會主催の「先進分村に聴く」といふ座談會記事と、「分村計畫の村を訪ねて」といふ全國主要農村分村計畫の詳密な調査報告がそれについてゐる。この座談會記事は關係官廳諸團體代表者、主要計畫農村代表者を交へたもので、農村の體驗談をきながら、いろいろな關係代表者が抱負・方策・希望等を縦横に語つた極めて興味ある且つ實益の多い記録である。こゝを讀みながら各農村の調査報告を併せて讀んで行けばこの運動の實情を詳細に知ることが出来るのである。農村の人々、わけても青年諸氏は何を措いてもこのやうな本を讀まなければならぬ。讀物としても面白いし、幾多の實益教訓を得、感奮興起せしめられること疑ひがない。巻末には尙必要な要項一覽が添付されてある。

## 廢品回收及更生品

關根 康 喜 著

四六判 二〇四頁・九五 成史書院

著者はこの方面を専門に研究してゐる人である。代用品並に再生品の問題は今日驚くべく重要性を有してゐるのである。廢品の回收などは厩屋の問題だと濟ましてゐることは出来ない。本書は廢品の意義から回收方法・廢品の種類・回收の價格等のこと、廢品と關聯して更生品のことなど、全體を十章に分けて、事細かに、讀んで面白く説き去り説き進めてゐる。著者は話術が巧みであるから、これなら知らず識らず讀まされてしまふであらう。かういはれたらなるほど「世の中に不用なものは絶對ない」といはざるを得ないやうである。

この種の書は兎角たゞ項目を並べたやうな無味乾燥な本に流れ易いものであるが、流石に手慣れた自由な説き方で、肩もこらずに讀ませ必要な知識を得させることが出来る。

## 養豚の實際 上、下巻

永田 厚平 著

三六判 二冊 二・〇〇 養賢堂

序によれば著者は畜産試験場に職を奉じて居られたそうだが、今は同試験場を去り靜岡縣下三方ヶ原村に養豚場を經營して居られる由。

この上下二巻に養豚に關するあらゆることが網羅されて居り、然も上下別々に分賣されてゐるから、必要に応じて上巻だけ、或は下巻だけを買ふことも出来る。その便宜の爲に左に内容目次を掲げて置く。記述はすべて實際を主とし平易である。

上巻 養豚經營の區別と必要な心構へ、豚並に養豚業の特異性、養豚經營の規模と儲け、養豚場の建設、種類の選擇、種豚の選擇と繁殖の方法、養豚技術の死命を制する榮養問題、飼料の調理法、飼料の配合と給與法養豚、飼料の特性。

下巻 自給飼料の利用と飼料作物の栽培、飼料の利用性と豚肉の品質、各豚の飼育法、豚の管理、繁殖障礙の



原因と是れが對策、普通遭遇する疾病と其の手當、最後の目的たる豚の賣却、豚の利用法と簡単な貯藏法、豚厩肥の活用。

趣味と實益  
農家の副業  
蜜蜂の飼ひ方

谷本 龜次郎 著  
谷本 保夫 著  
四六判 一七三頁 一・二〇 泰文館

著者は三重縣上野町の四時福農場の經營者で、本書は同農場の經驗を基礎としたもので極めて平易に實際的に述べられてある。

實用農藝全書第二

第二一 農産加工汎論

西田 孝太郎 著  
特小判 三三九頁 一・二〇 明文堂

著者は農學博士。本書は少々扱ひ方が専門的で、農産加工業の原理を主としてゐるが、序にもある通り、この原理に通曉しないで、單に加工技術だけでは決して斯業の成功は期し難いのである。原理を扱つたものとしては平易な書きぶりである。

胡瓜栽培の實際

堀 準爾 著  
四六判 二二五頁 一・三〇 泰文館

西瓜栽培の實際

堀 準爾 著  
四六判 二四二頁 一・五〇 泰文館

茄子栽培の實際

堀 準爾 著  
四六判 二二九頁 一・三〇 泰文館

同一著者の筆になる三著を揚げて見る。何れも實際を主とした平易な敘述で、決して之が最上のもものと云ふことは出来ないが、兎に角何處の農家でも普通に手がけてゐる胡瓜、西瓜、茄子を主題として品種、栽培、管理、收穫から販賣、加工、收支に迄及んだもので、一應網羅しつくしてゐる。その意味で何等かの役に立つものと思ふ。著者は長野縣立丸子農商學校教諭である。



666  
102

666  
102

發行所一覽

(推薦圖書は總て日本青年館  
需品部圖書係で取次ぎます)

朝日新聞社 麴町區有樂町二ノ三  
一元社 本郷區弓町一ノ二五  
改造社 芝區新橋七ノ一二  
科學主義工業社 麴町區有樂町一ノ二  
啓文社 本郷區元町二ノ二一  
今日の問題社 芝區田村町四ノ一八  
三省堂 神田區神保町一ノ一  
實業之日本社 京橋區銀座西一ノ三  
新潮社 牛込區矢來町一七  
砂子屋書房 下谷區上野櫻木町二七  
成史書院 荏原區中延町七二七  
積善館 神田區淡路町二ノ一七  
大菩薩峠刊行會 日本橋區本町二ノ一  
大東出版社 芝區芝公園七號地一〇  
大日本雄辯會 小石川區音羽町三ノ一九  
大日本防空協會 麴町區內務省內  
泰文館 神田區神保町一ノ五〇

第一書房 麴町區三番町一  
第一出版協會 神田區三崎町二ノ二二  
中央公論社 麴町區丸之内丸ビル五八八區  
千倉書房 京橋區京橋交叉點  
東海出版社 麴町區內幸町大阪ビル  
東京日日新聞社 麴町區有樂町一ノ二  
南支調査會 麴町區內幸町二ノ七正求堂ビル  
日本公論社 神田區一ツ橋教育會館內  
羽田書店 日本橋區通二ノ二エンバイヤ  
富山房 神田區神保町一ノ三  
むらさき出版部 神田區神保町二ノ二  
明文堂 神田區錦町一ノ四  
有斐閣 神田區神保町二ノ一七  
養賢堂 本郷區森川町七〇  
陸軍畫報社 京橋區木挽町八ノ四  
人文書院 京都市河原町二條下ル  
大阪毎日新聞社 大阪府北區堂島上二ノ三六

推薦圖書目錄

第二十輯

昭和十四年八月二十三日印刷  
昭和十四年八月二十八日發行

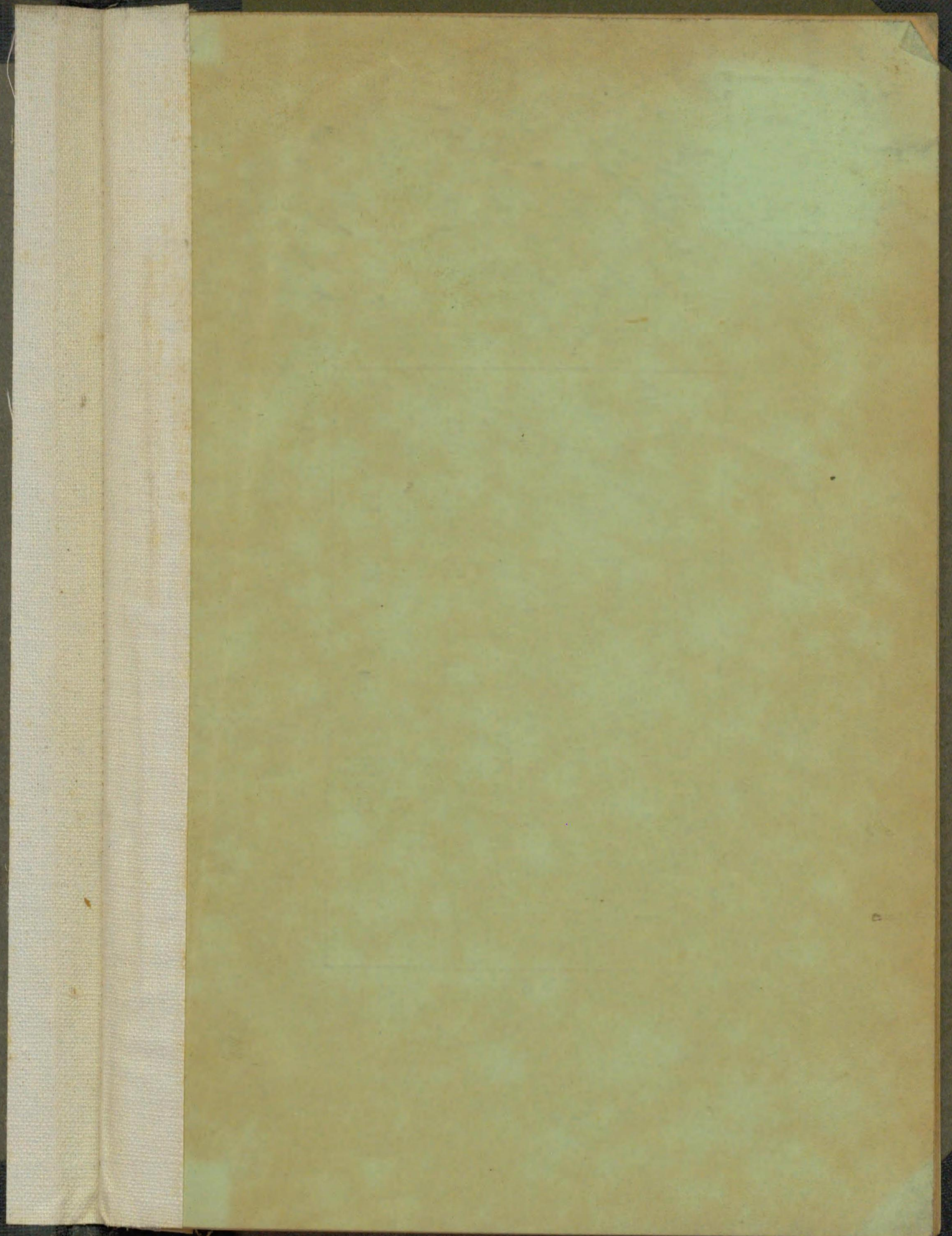
【非賣品】

編輯兼 發行所 東京市四谷區霞ヶ丘町十一  
熊谷辰治郎  
印刷者 東京市淺草區小島町二ノ十五  
南金太郎  
發行所 東京市四谷區霞ヶ丘町十一  
大日本青年團本部

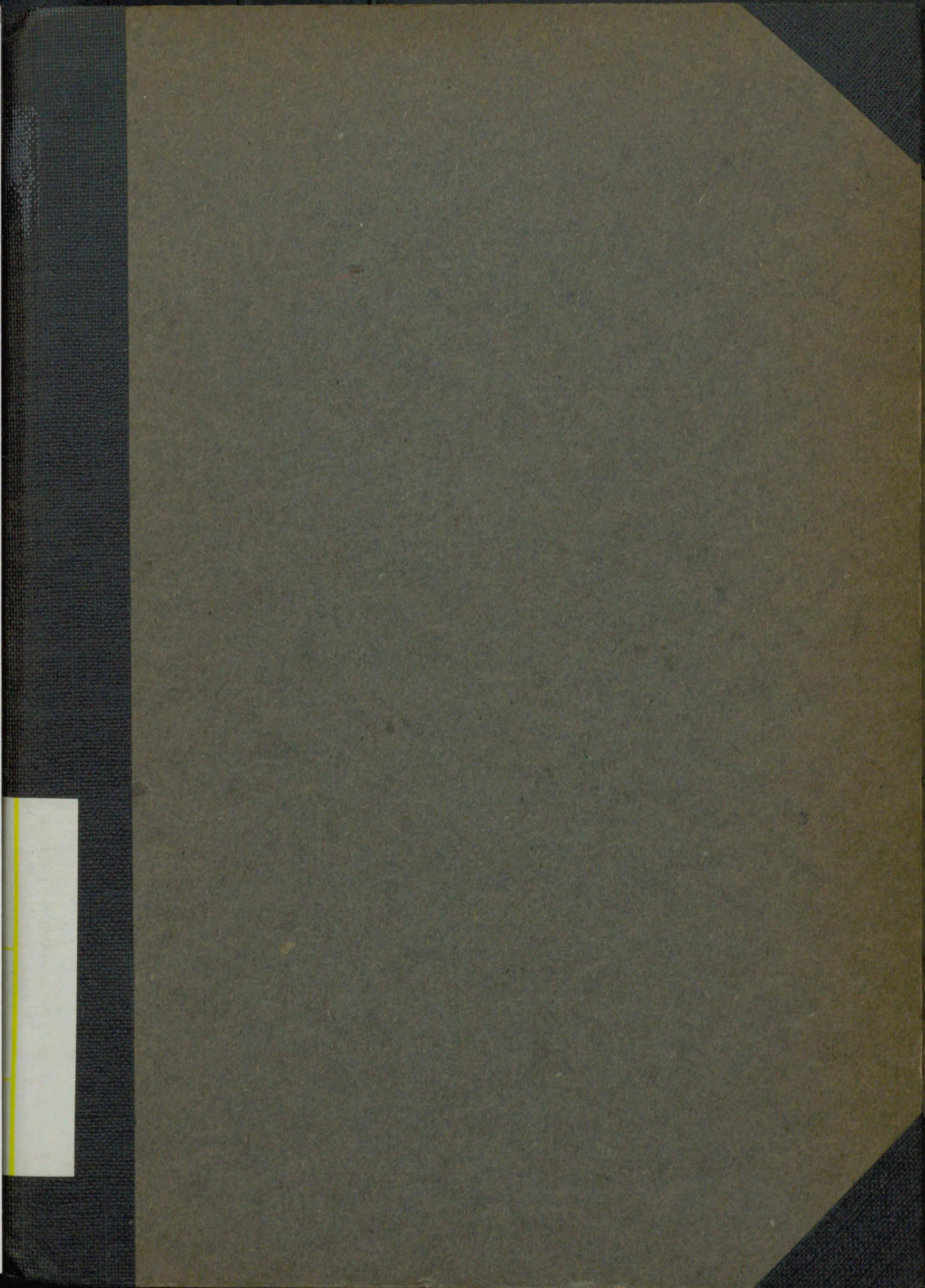
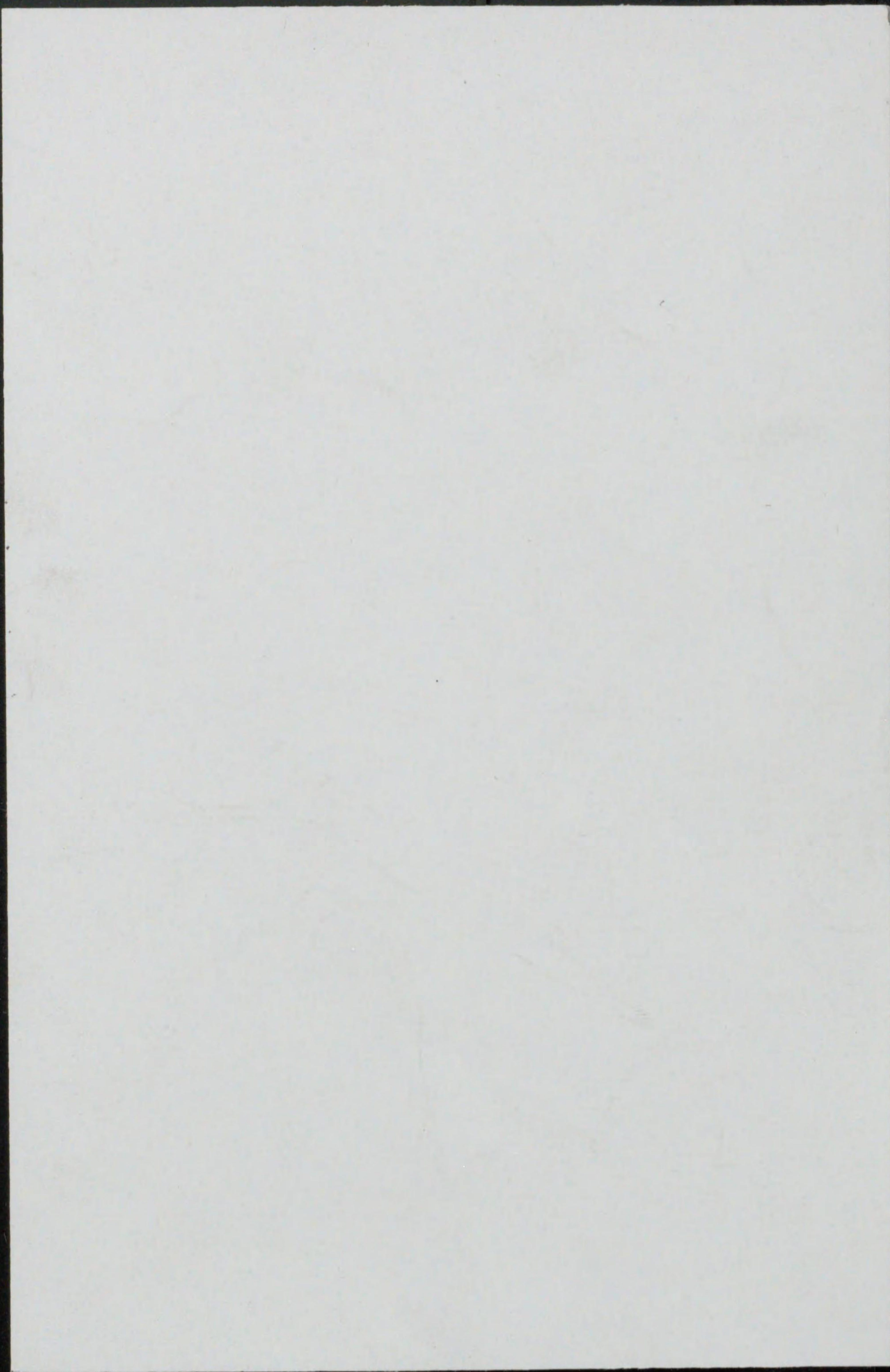
行印所刷印ミナミ



666  
102







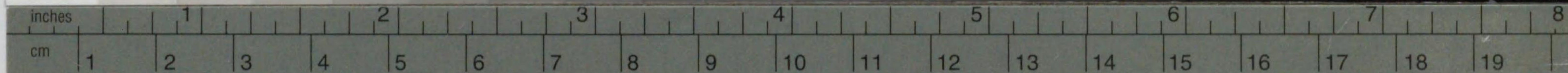


# Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

**A** 1 2 3 4 5 6 **M** 8 9 10 11 12 13 14 15 **B** 17 18 19



# Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

